

ココ島『水中撮影ウラ日記』

ココ島の海のベストシーズンは乾季ではなく雨季になります。理由は雨季の方が乾季より魚影が約10倍濃いからです。

太平洋の西からパナマ海流がココ島を通過してガラパゴスまで南下していますが、雨季には大陸から太平洋に向かって貿易風が吹き、海面が西へ押されて下がるので、その分の水量を補うために深層から栄養分の高い湧昇流が上がってくるため、魚が浅場へ上がって来ます。また深層からの湧昇流は水温が低いため、水面温度が下がりハンマーヘッドシャークの大群が水面近くまで上がって来ます。

エルニーニョ現象はこの貿易風が弱まるため、太平洋の西から暖水塊が偏西風に乗って徐々に大きくなり、南米大陸付近まで東へ移動するため湧昇流が浅場へ上がれず、イワシ類等の魚影が激減して、ガラパゴスではペンギンが繁殖を止めます。また水温が5～10度も上がるため海草類が生育せず、ガラパゴスではウミグアナが大量に餓死します。(ウミグアナは餌が減少すると身体を約20%縮小させます)

そして膨張した暖水塊で海面が5mも上昇し、水蒸気が積乱雲となってカリフォルニア半島からペルー西海岸まで集中豪雨をもたらす高潮と洪水が発生します。

雨季はほとんど毎日、曇りか雨のため、海の中は暗く水中カメラマン泣かせのポイントです。MIDWAYの映像と比較すると暗いのが分かります。ムービーカメラは人間の目より少しだけ明るく記録しますが、スチールカメラ(写真)はもっと難しいです。そのためダイビング雑誌社やテレビ局が敬遠し、日本では今まであまり撮影されていません。

魚影が濃すぎるのも問題で、ハンマーヘッドシャークの手前に小魚の群れが半端でなくゴチャマンといるため、ハンマーヘッドにピントを合わせるとオートではピンボケになるので、すべてマニュアルで撮影しなければなりません。

またカレント(海の中の流れ)が非常に速く強いため、自家製のカレントフック(カジキマグロ用釣り針とナスカンをロープで結んだ流れ止め)2セットを身体に取り付けて針を岩にフックし、激しい流れに負けないよう、また映像が手振れしないように両脇をガッチリ締め、カメラに水中マスクを押し当て固定して撮影します。

ココ島は世界のダイバー憧れの海でベテランが行くポイントです。

参加しているダイバーの多くは経験本数が数百本以上で、ビギナーや中級者はほとんどいません。それでも時々ダイバー(日本人も含めて)が何時間も流され、スタッフが探しているそうです。スタッフに聞いた話では過去に何十時間も流された欧米人女性がいて、参加者のヒンシュクを買ったそうです。普通の海とは違うので、気軽に行くと生命の危険があるチョット怖いハイレベルのポイントです。

クジラ、イルカ類はダイバーの出す泡やスクーバの機材音を嫌うため、主にシュノーケルで撮影するので、息を止める時間が長いほど良い撮影ができます。今回はラッキーなことにダイビング後にイルカに数回遭遇し水中撮影出来ました。

ザトウクジラを発見しボートで追いかけて、ザトウの前方へ先回りして飛び込む予定でしたが、船の上から水中に入るタイミングをギリギリまで待っている間に水中深く潜って行ったため撮影できませんでした。

1994年5月西オーストラリアで撮影したジンベイザメは魚ですので、あまり賢くなく、先回りして撮影できますが、哺乳類の賢さはザトウでも良く分かりました。実はNHK旧番組『生き物地球紀行』制作統括ディレクターの紹介で1999年7月に北大西洋ド真ん中(ヨーロッパ大陸と北米大陸の間)のポルトガル領アゾレス諸島ピコ島でマッコウクジラ(最大20mになる)を6日間追いかけて水中撮影しました。しかし、作品としては失敗でした。

理由はジンベイザメと違ってマッコウは非常に繊細で賢く、チョットとした音でも水中深く潜ってしまい、シュノーケルだけで近づいてもなかなか撮影させてくれません。

『生き物地球紀行』は1998年6月中旬から約1ヶ月半、このピコ島でマッコウを追いかけて、すばらしい映像を撮っています。

ザトウもマッコウも同じ哺乳類ですのでクジラは本当に人類と同じくらい或いはそれ以上に賢いかも知れません。

マッコウは頭に冷たい海水を吸い込んで脳油(成体したオスは約2トン)をゲル状化した重みで潜行し、浮上時は頭に暖かい血液を送ってゲル状化した脳油を液体化して、その浮力で浮上し、水深3000~4000mまで一息で約45分間潜水します。そして最大約17mのダイオウイカを主食にしています。このイカが昔、欧州では海の魔物としてお化けダコとして恐れられ小説になりました。

尚、小説『白鯨』のモービーディックはアルビノになった成体したオス(約20m)のマッコウクジラのことです。

マッコウクジラについて詳しく知りたい方は学術的専門書を持っていますのでお貸しします。

シーハンターの場合、一般人は11日間クルーズで7日間21DIVE(ナイトダイビングを除く)。航海日数が長いので日本人はほとんどいません。

NHK『生き物地球紀行』の場合、撮影は約1ヶ月半でしたがアンダー・シーハンターをチャーターし、30日間クルーズで60DIVEでした。

シーハンターより古い船のため、片道3時間も揺れながらココ島へ到着した時にはスタッフ全員がダウンしたそうです。

NHKディレクターの話では撮影テープは水中、陸上合わせて40分×50本(2,000分)でした。私の場合は水中60分×5本、陸上60分×6本の計11本(660分)でした。

私は仕事でなく趣味の領域で自由に撮影、編集し、期限やノルマがないので気楽ですが、目標はハイビジョンカメラで長期間撮影し、NHKに負けない作品を制作したいと思っています。

以上
浜谷 優